

と ひと 玉淀の歴史を紐解く！

～玉淀のあゆみと水天宮～



鉢形城跡から玉淀(市街地方面)を望む



遊覧道路と桜並木

寄居玉淀水天宮祭は、昭和6年8月5日に最初の大祭が挙行されてから、来年で90年を迎えます。この歴史ある祭は、鉢形城跡北側を流れる荒川の深淵が「玉淀」として命名された記念行事として始められました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりましたが、この機会に改めて「玉淀」の歴史と、その歴史の中から生まれた「水天宮」について紐解いてみたいと思います。

図総務課 ☎581・2121内線315

玉淀のあゆみ

国指定史跡・鉢形城跡の下の川原一帯は、大正の初期までは両岸の樹木がうっそうと茂り、人跡もまれな場所でした。この流れの淀むところに淵があり、深さは10mほどで、青々とし渦を巻いていたといわれています。この淀んだ淵を中心に、上下流1.5kmくらいの地が現在の「玉淀」になります。当時はこの名称はなく、俗に「城下(しろした)」と呼ばれていました。

大正から昭和の初期には、当時の市街地を中心に結成された「寄居町青年会」が、荒川の市街地側の沿岸に約6m間隔で500本ほど桜を植樹しました。この頃はまだ沿岸には道路もなく、桜を見に訪れる人もなかったそうです。

昭和6年2月、当時の市街地居住の町議会議員を中心に、この桜並木の下一帯、荒川沿岸に遊覧道路を整備する計画が持ち上がりました。早速、市街地各地区の有志の協力を求めるとともに、関係地権者から道路用地を借用し、道路の開削が始まりました。この



道路は、子持瀬坂通り(現在の寄居郵便局南側、子持瀬付近)を起点として正喜橋通り、十一屋公園(現在の雀宮公園)の北裏通りを経て、東武東上線の鉄橋の堤から北上して樋の下坂(現在の玉淀駅南側付近)に至ります。長い通りとなりましたが、その年の桜の花が咲くまでの完成を目指したため、



現在の水天宮社殿

工事期間はわずか4週間ほど、不完全ながらも側溝をつくり、砂利も敷かれました。道路が完成したことにより、この年にお花見ができるという話が町内に広がると、花見客が押しかけ、気の早い商人は小屋がけをして酒やさかな、すしや団子を売る店が十数軒出店し、文字通り花の一大名所となったそうです。

「玉淀」の名称は、昭和6年4月29日、埼玉県史跡名勝天然記念物に指定される際、県により命名されました。「玉」は埼玉の玉で美しい、「淀」は水

味とされています。

この命名式と同時に「寄居保勝会」(観光協会の前身)が結成され、遊覧道路沿いに小料理店の建築や観光施設の整備が進んでいくこととなります。

水天宮

寄居保勝会では、「玉淀」を世に出すため苦心していました。当時、長瀬では雄大な景勝地と宝登山神社とをタイアップした宣伝を行っていたことから、玉淀も神社を勧請して祭事を行ってはどうかという話が出たようです。

そういった中、正喜橋の下流側にある川に面した山林で、石の宮が発見されました。これは俗にいう水神様と

いって、地元の漁師たちがお祀りし、水難除けの神様として信仰していることがわかり、このご神体を迎えて水天宮を祀ることとなります。新しい水天宮社殿は、小谷野権蔵氏と地元名士のご厚意により、石の宮上方の遊覧道路

沿いに建築され、ご遷宮されました。

この水天宮は、水難除けと安産の神様として広く信仰されており、日本橋の水天宮さまの縁日が毎月「5」の日



現在の奥の院(石の宮)

であることから、最初の大祭は昭和6年8月5日に挙行されました。しばらくは毎年8月5日に大祭が行われていましたが、その後、8月の第1土曜日に移り、今日まで引き継がれています。

参考資料・寄居町史 通史編



Tamayodo Express

団十郎朝顔がきれいに咲きました！



中町区では、雀宮公園が七代目松本幸四郎の別邸であったことちなみ、6月から団十郎朝顔を育て、7月から8月にかけてきれいな花を咲かせました。花の色が、二代目団十郎の歌舞伎の演目「暫(しばらく)」の装束の「えび茶色」に似ているため、団十郎の名前が冠されたと伝えられています。

寄居玉淀水天宮祭 2020 Virtual 公開中！

町では、寄居玉淀水天宮祭を今年も楽しんでいただこうと、過去の動画を活用し、一部CGを加えた動画「寄居玉淀水天宮祭 2020 Virtual」を寄居町YouTubeチャンネル等で公開しています。ご家庭などでご覧いただき、寄居の夏を感じていただければ幸いです。



寄居町YouTubeチャンネル